

201 資料 労働の問題と縮小社会での在り方
青野 豊一

以下の文章は、岩波書店『自由への問い⑥労働—働くこと
の自由と制度—』佐藤俊樹責任編集の中の、「現代の
労働・仕事・活動 ハンナ・アーレントの余白から」(佐
藤俊樹 執筆)を参考にまとめている。

—「労働」・「仕事」・「活動」の視点から—

ハンナ・アーレント(1906-1975年ドイツ出身のユ
ダヤ人)の人間の営みの三分類を導きの糸として、
考えていきたい。アーレントは、①「労働 labor」と
②「仕事 work」と③「活動 action」の三類型を提示
している。*以下の「引用」は、『人間の条件』から

①「労働 labor」とは、私たちの生命を維持していく
諸活動である。この生産「労働」とは個人的・社会的
消費と結びつく労働のことである。だから、その
労働の産物としては、個々の消費活動の後に再
利用できるものは少ない。生物としての生命の
循環、自然の営みの諸過程である。

「労働とは、…労働によって作り出され、生活の
過程の中へ送り出される生物的な必要物に拘束
されている。」

②「仕事 work」には、仕事をするという意味ととも
に、作品という意味もある。まあ、言い換えると、
耐久性のある物・事を、働くことによって成果とし
て残す諸活動のことである。制作物、作品は、そ
の製作者の死後も生き残り、そしてそれが人々の
共有物となり、この世の継続性を指し示す物・事と
なる。この世から去らねばならない必然性をもつて
いる人間の記憶を受け継ぎ、人間世界にその痕
跡を残す働きのことである。

「人間存在の非自然性に対応する営みであ
る。…仕事はあらゆる自然環境とは異なる物の
「人工的」世界を作り出す。…仕事の人間的条件
は世界性である。」

具体的には、専門的技能をもった職人のような
仕事であろう。そして、このことを通して、人間独自の
世界を作り出すようなものであるとも言える。だ
から、専門職とともに、管理的部門の仕事もここに
含まれるであろう。その他では、学者や教師、そし
て評論家やメディアの正社員もあてはまる。

③「活動 action」とは、人と人との間で行われる言
動や共同的な行動のことであり、社会的行動のこ
とである。これは、自分以外の他者を必要とするも
のである。「活動」は、社会と孤立して生きている
のではなくして、群れをなして社会を形成している
人たちのなすことである。言葉と行為によって人は
人間世界の網の目の中で生きること、自分がど
のような存在であるかを自覚させられるものでは
ない。自分が何者であるかは、他の人たちに見られ
聞かれることで現れ出るものである。

「活動とは、物や事の介在なしに人々の間で直接
なされる唯一の営みである。多数性という人間の
条件、すなわち地上に生き世界に住むのが一人
の人間ではなく、人々であるという事実に対応して
いる。」

これは、公共的なことをしている営みのことを意
味しているようだ。政治活動や非営利団体である
NGO や NPO 等で行っていること、そして湯浅誠氏の
ような社会活動家のしていることがあてはまるで
あろう。

アーレントのこのような区別は、働く人を労働者
という枠にはめてしまうことに対する批判である。
また、マルクス主義の言うような、人間を労働力商
品として一括りにすることへの批判でもある。つま
り、私たちの営みには、「労働」という言葉でまとめ
てしまうことのできない「仕事」や「活動」という分野
もあることを指摘している。この異質さを踏まえて、
論議すべきであろうと思われる。

産業革命以後、人々の働く姿とその意味は、大
きく変化した。作業場に機械が入り、多くの人たち
は労働者として、労働力商品として資本家たちに
雇用された。それまでの職人としての営みは、
次々と制限され消滅してきた歴史がある。そして、
特に近年コンピュータ化の進展で、変化が急激に
生じてきた。そのため、知識に関わる専門職と制
度に関わる管理部門の人たちが労働人口の中で
一定の割合を占めてきた。それまで事務職がして
いたようなことが情報機器(パソコン)に代替えされ、
専門職や管理部門職、そして現場の労働者が自
分でするようにもなってきた。そのため、オフィスや
工場でも、「仕事」的に働く少数の管理部門職や専
門職と、その他の「労働」をする多数の者に二分

化され、「労働」は質の劣った働き方として、「仕事」は質の高い働き方として位置づけられている。つまり、序列化されているのだ。

現代社会では「仕事」的な労働が最も重視されているのだが、この労働をするには、ある一定以上の文化水準や教育レベルが必要である。そのため、「労働」と「仕事」をしている人たちの間では、抱いている社会像や自分の将来像も異なっている。このようなことが、現代社会における「能力差」として意識されている。

「労働」が提供する商品やサービスは、他の人たちによって消費される。そのため、働き方は、他の人の需要の動向に大きく左右されている。それに合わせるしかない。そのために、一生懸命働いても、その「労働」が自己実現ということにはなりにくい実態にいる。そのため、消費活動に夢を託すこととなる。働き過ぎと浪費の悪循環となって現れ出てくることになりかねない。

それに対して、「仕事」が提供する商品やサービスは、知識や制度なので、消費され尽くすことはない。働き方は、他の人たちの需要の短期的な動向には左右されにくい。長期的視野で商品やサービスを提供するのが、「仕事」の在り方であろう。だから、独自の創造性が要求される。つまり、「仕事」の内容について一番正確な判断ができるのは、この成果を受け取る側ではなく、専門知識と総合的視野をもっている本人となる。だから、部分的間接的ではあるが、自己決定できる領域がある。そして、雇用の安定という流動性を下げた方が、より成果が期待できる。

「労働」には、働く/働かないという自己決定ができるが、働き方では他の人の評価や指示に従うこととなる。そのため、雇用の安定性が「仕事」に比べて薄い。首切りの対象者となりやすい。

問題はこの「労働」と「仕事」が序列化されていることであろうが、この間の移動が容易であれば大きな問題とはならないが、それが難しいのが現実である。社会階層とその移動の調査を観ると、「仕事」につける比率は、家庭の文化度、親の教育度(学歴)によって大きく異なっているのが実態である。日本社会は、このような職業選択の機会の平等が保障されていないのだ。そのため、報酬と雇用条件で大きな差ができてしまい、大きな問題となっ

ている。そして、「労働」と「仕事」の間にある中間地帯にいる労働人口が減ってきているので、この差をさも客観的な「能力差」として、「勝ち組」と「負け組」として分けられているのが現状であろう。

さて、農業の専門家としてそれなりに自覚している者は、日々の生産労働で経験と熟練深めて独自の創造性を発揮して「仕事」をしていることになり、日々の労働が自らの成長につながっていると言える。

しかし、日々の具体的農業「労働」は天候と消費者の動向に、決定的に左右されている。だから、農業という人間の営みは、「労働」であろう。この営みは、先に書いたように受苦的要素が強い。このことを承認した上で、「仕事」としての農業労働を目指さなくてはならないが、それには社会総体の在り方が変わらなくてはならないであろう。

*「労働」と「仕事」が序列化されていることを指摘したが、「仕事」をしている人たちの問題点については触れていなかった。実は、この「仕事」的なことをしている人たちには、大きな問題がある。彼らには、大きな落とし穴がある。

大きな会社で専門的な仕事に従事していたり、公務員として働いている人たちは、一つの組織に異常な熱意で所属していることである。そのために、人格が単一化しまいがちである。会社の倒産、定年、失職等のために人格崩壊や生きるエネルギーがなくなってしまうことがあるが、これは、それまでに作られていた対人関係が、自分が何者であるかを保証してくれる他者が一か所に固まっています。一つの価値観で統一され評価されているためである。そのために、そこがなくなると自分が社会的にゼロとなってしまうことになりかねない。

定年退職した後は趣味の生活を、なんて言ってもそれは無理な事である。その趣味の生活でも、それができ得る人間関係がなくてはならない。そうでないと、これからは、老人性のうつ病の人がたくさん出てくることになりかねない。40歳台、50歳台から、仕事以外のことに、ある程度の時間とエネルギーをつかうこと、いろんな集団内での人間関係に帰属する努力が必要となるであろう。そうしないと、その後の人生に大きな差ができてしまうことになる。

そのためには、複数の関係性を作り出す努力を、

若い時からしなくてはならない。複数の集団に、それぞれ違う役割で所属することでしか、自立的思考なんてできないと言えよう。ここでは責任を取るつもりで行動し、あそこでは人の後からついていけばよいというような多様な関係性を経験し、いろいろな集団に同時に所属していないと、自分の社会的な人格の多様性は、理解できないであろう。

補説1 収奪・再分配という交換関係の役割

このことについて、市場経済との関係を通して簡単に記載したい。

私たちの生活は、「市場での貨幣による交換関係」のみで、成立していない。しかし、この交換関係が現代社会では主導的な役割を果たしているため、この貨幣による経済活動のみに意味を見出して、その他の「互酬交換関係」と「収奪・再分配による交換関係」を無視している人が多い。

実は、市場経済そのものが適切に機能するには、経済の拡大による利潤を増やすことを図るだけでは、十分に機能しないのだ。例えば、治安の維持や公的サービスという国家行政機関(政府)の役割が大切となっている。これらは、利益のみに駆り立てられている経済活動より、大きな意味を持っている。つまり、資本制生産様式が機能するには、このようなさまざまな諸制度に頼っているといえる。公教育、公的医療、公共交通機関、そしてこれらを通じた「信頼関係」が、資本主義経済というシステムを支えている。

だから、この資本主義というシステムは万能ではなく、実は大きな欠陥があることになる。このことについては、あのアダム・スミスも指摘している。このように市場経済を推進したとされてきた人たちも、利益追求だけで十分であるとは思っていなかった。市場経済という「見えざる手」に任せておけばそれでよいとは考えていなかった。「市場経済」に自浄能力があるとは、考えていなかった。

このことは、医療がすべての国民に保障されていない場合、景気の悪化によって生じた傷口は、すさまじい勢いで広がっていくであろうことを考えると、よりはっきりしてくる。

そして、このことで、景気は、さらに悪くなる。工場やその他で作り出されたサービスも、多くの人

たちに消費されることで経済活動は成立しているのだから……。ほんの一部の富裕層に消費されることで、社会経済は成立してないのだから、……。

補説2 プロレタリア、そして Kommunismus??

私は、先に、次のように書いた。「労働」が提供する商品やサービスは、他の人たちによって消費される。そのため、働き方は、他の人の需要の動向に大きく左右されている。それに合わせるしかない。そのために、一生懸命働いても、その「労働」が自己実現ということにはなりにくい実態にいる。そのため、消費活動に夢を託すこととなる。働き過ぎと浪費という地獄の循環となって現れ出てくることになりかねない。

マルクスは、この「労働」をしている人たちに社会変革の可能性を見出そうとした。『ヘーゲル法哲学批判序説』という美しい言葉がちりばめられている書物の批判はいくらでもできるが、ここから何をくみ取り、どのように読み替えていくことができるかが私たちにとって大切な事である。

マルクス主義者達の言うように、「労働」という営みをしている人たちが社会変革を担うとしても、それは彼らがブルジョアのように豊かな生活をしたいからではないであろう。豊かな生活をしたのであれば、資本制生産様式による限りない経済成長を目指す方がよいことになる。だから、彼らは社会変革をせざるを得ないというより、した方がよいということに気付きやすい立場にいるという意味であろう。ブルジョワたちは個々人の利己心を通して物事を見ることを重視していることに比べて、プロレタリアは倫理的価値判断をともなった行動へと決断しやすい条件にあると理解すべきであろう。人・物、そして自然に強く規制されている日々の「労働」をしているためにその日々の「労働」が自己実現とかけ離れた実態にいるから、受苦的「労働」を他の人たちと一緒に関わってしている等の実態から、現状への問題意識を抱きやすい環境条件にいると理解すべきなのであろう。だから、資本家や資産家たちの利益を横取りするために社会変革をするのではない、と明確に理解すべきであろう。

Kommunismusという言葉は今後も使用するのではあ

れば、これは資本制生産様式による生産力の成長の延長上に、物質的に満ち足りた労働者たちが主人公となる世界を創り出すことではない。これでは、旧ソ連と同じ地平にすることになる。

コミュニズムに新しい意味をもたらすとすれば、それは、巨大な生産力を享受して豊かさの分配を公平にして個々人の利己心を充足することではないであろう。むしろ、物質的に豊かな世界と言う幻想を、すっかり破壊してしまうことであろう。そうしないと、人類の未来はないであろうことが、多くの人たちに明らかになってきているのではないか。だから、コミュニズムは資本制生産様式に対するものというより、人類の生存の危機に対応できる協同的所有であり協同的生産・消費を最も重視しているものとしてあるのではなからうか。

非人間的なものとなっている現状の「労働」「仕事」「活動」という人の営みの在り方とその関係が変わらなくてはならない。例えば、金銭を得るだけで働くことの目的ではない。生産して消費することそのものが人間の自由な意識の表現であるためには、私たちの諸活動が貨幣のみに強く媒介されているものに限定されない社会になっていなくてはならない。でも、先に述べたような労働と消費の地獄の循環にますます陥っていく人たちも、当然引き続いて出てくるであろうが、…。

現状の生産活動と物・人・事の交換関係の問題性を普段の生活から感じるができる機会に接することが多いのが、そして現状のライフスタイルを変えていくことに積極性を発揮しやすいのが「労働者」達かもしれない。

そして、このような生産と消費活動をしている者たちの中で、身体が自然と深く結びつけられているのが農業「労働」である。日々自然環境の中で農業「労働」をしている者は、限りない経済成長などありえないことを肌で感じ取れる。

*だが、成長を享受しているであろうと思える都市生活者達へのねじまがったひがみ意識に囚われて、労働運動に露骨に反発することもある。

人間の享受が物質的豊かさを巡って展開されるのであれば、人間と自然との関係は常に不満足の状態となる。自然を相手とする農業では、なかなか物質的豊かさという満足感はなかなか実現され

ないであろうから…。飽食の欲求を変えていかなない事には、この不満足状態は解消されない。豊かな人生とは、多様な豊かな欲求を持つことであり、分を知る生き方をすることであろう。自然を相手として生産活動をするといつてもない失敗もすることがあり、努力しても天候等による不作のこともある。その時、その欠乏に社会的意義があることに気付く。欠乏は、人間にとって最大の富である他の人の存在に気付かせることになる。このような受苦的な社会的結びつきの意味を再確認できる機会となる。物質的欠乏が他の人たちとの相互扶助の関係に気付かされるのであって、物質的充足は他の人たちとの関係を意識させない。さも自分一人の能力で獲得したかのごとく思ってしまう。欠乏は他の人たちの力を頼みとする意識になるのだ。

物質的に有り余ることがなくても、人間的充足こそが、コミュニズムであると言い得るかもしれない。他の人たちと自然の大切さを体感している世界、これがコミュニズムであろう。また、自然と人間を食い物にして限りない収奪をする資本の活動を無化していくことを通して、この地球と人間社会を積極的に肯定することであろう。

その時、個人的所有を否定してしまうことではない。自分自身の身体と心と、個人的な物の所有まで否定すると、自由もなくなってことになる。コミュニズムは私的所有を全面禁止する国有化した社会システムではない。所有なくして自由は成立しないのだから、この所有と自由を相互確認できるように積極的に推し進めるものこそが、私たちの求めている未来社会であろう。この個人的自由ということ消し去って社会に埋め込むことは、もはや不可能な事なのだ。昔の共同体に埋没した生活は、もうあり得ないことを踏まえた未来社会でなくてはならない。

そのためには、全国単一のシステムで社会をうまく機能させるという幻想的社会運動を推進していくのではなくして、いろいろな仕掛け・仕組みをその時代とその地に応じて構築していくという普段の取り組みが大切なこととなるであろう。理想的社会システムを夢見るのではなく、…。